

青年期の男性性形成に関する一考察

—アイデンティティ危機を体験した大学生の事例から—

多賀 太

1. 問題の所在

本研究の目的は、青年期男性の生活史を通して、アイデンティティ論の視点から男性性¹⁾の形成過程を考察することである。

教育研究の主要なテーマである人間形成や教育達成において、ジェンダーはもはや避けて通ることのできない問題であり、教育におけるジェンダー研究は今日までに多くの知見を蓄積してきた。しかし、従来のそうした諸研究の多くは、①性差および性差を生み出すメカニズムへの注目、②女性への注目、という特徴を持っており、一方の性における多様性や男性の問題を等閑視しがちであった。

第1に、性差を生み出すメカニズムは「性役割の社会化」研究の流れの中で行われてきた。しかし、そこでは、性差に注目するあまり、全体社会をセクシズムという一元的な価値が浸透したシステムとみなし、われわれの人間形成にかかわる家族、学校、仲間集団、マス・メディアなどはそうした一元的な価値を伝達する「社会化エージェンシー (エージェント)」であるとされてきた²⁾。それゆえ、多くの研究が社会化エージェンシーに潜むセクシズムを顕在化させることを目指してきた。確かに、そうしたスタンスは、男女の不平等を是正するという政治的な目的に対しては一定の成果をもたらすかもしれない。しかし、一方でそうした見方は、フェミニズムのインパクトを受けて変動しつつある社会、あるいは男女平等とセクシズムという矛盾し合う価値が錯綜する社会における人間形成の諸相を見えなくさせてしまう。さらに、たとえ価値の錯綜を考慮したとしても、社会化エージェンシーの考察のみに終始する社会化研究

は、なぜある者は錯綜し合う一方の価値にコミットし他の者はもう一方の価値にコミットするのかという問いを不問にする。ジェンダーの多様性を説明するためには、一元的な価値を受動的に内面化するという人間観よりも、多元的な価値の中から主体的にコミットする価値を選択していくという人間観に立ち、社会化される側の価値の受容の問題をも考慮することが必要である。

第2に、従来のジェンダー研究はどちらかといえばフェミニズムによって抑圧される側と見なされてきた女性の問題を強調する傾向にあった。近年、ようやく行われるようになったジェンダーの多様性や性内 (intra-gender) 分化に関する研究も、すべて女性のみを扱ったものである (越智他 1992, 宮崎 1993, 中西 1993, 吉原 1995)。こうした女性への注目に対して、これまで男性にはほとんど注意が払われてこなかった⁹⁾。男性性に焦点を当てた研究の必要性は、次の点から主張できる。第1に、確かにジェンダーの視点が持ち込まれる以前の教育研究の多くが人間=男性という暗黙の合意のもとに行われがちであったことは否めないが、それらをもっともはや男性に焦点を当てた研究は必要ないということではできない。なぜなら、男性を対象としたそれらの研究は、必ずしも男性の人間形成において「男性性」がもつ意味を意識していたとはいえないからである。第2に、「ジェンダーと教育」研究は、「男性=公的領域、女性=私的領域」というそれまでの認識に対抗して「公的領域」である学校教育の中に女性を可視化させ、人間形成や教育達成における女性特有の問題を指摘してきた (森 1992) が、「私的領域」の中に男性を可視化させることは怠ってきた。男女平等理念の浸透やジェンダーの多様化が進行しつつある今日、「男であること」や家事・育児やセクシュアリティといった私的領域での問題が男性の人間形成にどう関わっているのかを明らかにする必要がある。

以上のような問題意識に基づき、本研究では、アイデンティティ論の枠組のもとで男性性形成過程をその主観的側面から考察する¹⁰⁾。しかし、だからといって、男性をとりまく社会の客観的状況を考慮しないわけではない。アイデンティティは、個人と社会の接点であり、個人の主観的世界と社会の客観的状況とをつなぐ概念である¹¹⁾。また、「新しいモロトリアム心理」と表現される青年たちのモロトリアム (心理社会的猶予期間) への居直りや、青年期以降の現代人の「モロトリアム人間」化 (小此木 1978) を見るかぎり、アイデンティティ形成を青年期の発達課題とみなすエリクソンのアイデンティティ論はその有効性を失いつつあるかのように思える。しかし、アイデンティティ論が「相対主義による行為の停滞という問題状況に始まり、モロトリアムを通じて、この危機が回復されたり、逆に悪化していく過程」(高橋 1994) を論じ

るものであるならば、それは「新しいモラトリアム心理」や「モラトリアム人間」をも考察の対象としているのであり、むしろアイデンティティ論こそがジェンダーに関する価値が多様化・相対化している今日のわが国における人間形成の考察に最も適したアプローチの一つであるといえよう。

以下では、まず本研究が依拠するアイデンティティ論に関して検討を行い、アイデンティティ論の立場からジェンダー形成を考察する枠組を提示する（第2節）。次に、ジェンダー・アイデンティティの危機を体験した男子大学生の生活史を記述し、彼らがどのような「危機」を体験しそれにどのように対処しているのか分析する（第3節）。そして最後に、事例の分析から得られた知見をもとに、ジェンダーに関する価値が多様化した社会におけるジェンダー形成に関して考察を行う（第4節）。

2. 分析の枠組と調査方法

(1) 分析の枠組

エリクソンのいう「アイデンティティ形成」とは、個人が「アイデンティティ危機」を契機として、幼児期以来学習してきた様々な役割や価値の中から取捨選択を行い、独自の自己像と価値観を形成していく過程であると理解される（Erikson 訳書 1969, 216-221頁）。そこでは、「社会的経験と社会的行為との間の直接的な因果関係」は前提とされず、むしろ「行為の背景を成す自律的な価値判断の能力」が重視されている。それゆえ、われわれはアイデンティティ形成の様子を考察することにより、個人が社会の支配的な価値に順応していく過程のみならず、支配的な価値に距離をおいたまま役割を演じるようになっていく過程や、対抗的価値にコミットしてゆく過程をも把握することができる。さらに、エリクソンのいう「アイデンティティ危機」を「私とは何であるか」という自己意識の問題」というよりもむしろ「規範意識の動揺によって、欲求性向もまた混乱し、行為の停滞が余儀なくされている」状態（高橋 1994）と理解するならば、個人の生活史におけるアイデンティティ危機を考察することにより、その個人が置かれている社会的環境における価値や規範の錯綜状況を、個人の主観を通して把握することができる⁶⁾。

一方、「ジェンダー・アイデンティティ」および「ジェンダー・アイデンティティの危機」の概念を理解するためには、ゴッフマンのアイデンティティ論が参考になる。彼は、エリクソンの「自我アイデンティティ」と対照をなす「社会的 (social) アイデンティティ」と「個人的 (personal) アイデンティティ」という概念を提起している⁷⁾。前者は社会的カテゴリーによって性格づけられる個人に対応しており、後者は他の誰

とも異なるかけがえのない個人に対応している (Goffman 訳書 1970, 173-174頁)。この区別に従えば、「ジェンダー・アイデンティティ」は個人に付随する複数の社会的アイデンティティのうちの一つであり、「男」/「女」というカテゴリーによって性格づけられるアイデンティティであるといえる⁸⁾。さらに、ジェンダー・アイデンティティの危機は、ジェンダー・アイデンティティ (男性性=男らしさ) と個人的アイデンティティ (個性=自分らしさ) との葛藤としてとらえることができる。ジェンダー・アイデンティティと個人的アイデンティティがより一致する傾向にある場合、個人はジェンダーをめぐるアイデンティティ危機を体験しない。そして、個人の男性性形成は社会構造としての男女間の関係 (=「ジェンダー関係」⁹⁾) の安定に対応しており、その過程において主体性はみられない。

一方、ジェンダー・アイデンティティと個人的アイデンティティがより一致しない傾向にある場合、個人はアイデンティティ危機を体験し、その危機に対して主体的にさまざまな方法で対処しようとする。例えば、ジェンダー・アイデンティティと個人的アイデンティティとの間に距離を保ったままにしておいたり、個人的アイデンティティをジェンダー・アイデンティティに近づけるよう自己変革を試みたり、個人的アイデンティティを固守しようとしたりする。その結果、個人は「肯定的アイデンティティ」を獲得することもあれば、「否定的アイデンティティ」に甘んじることもある¹⁰⁾。また、個人が採った対処の方法は、ジェンダー関係の安定に寄与することもあれば、逆にその変動に寄与することもある。ジェンダー・アイデンティティの形成とは、こうした危機への対処、すなわちジェンダーに関する価値が相対化している状態から、意識的に特定の価値にコミットすることで、自分なりの男性 (女性) としての自己像を形成していくプロセスである¹¹⁾。

(2) 調査方法

1995年5月から10月にかけて、大学4年生 (一部就職浪人を含む) のうち、「男は仕事、女は家庭」という性別役割分業から比較的自由な価値観を持っている者11人に対して、50分から100分にわたる半構造化面接を行った¹²⁾。会話は本人の了承を得て、すべてテープに録音した。主な質問項目は「将来の自己像」「ジェンダー観」「男性としての自己評価」「現在までの『社会化システム』¹³⁾ (家族、学校、仲間、メディア等) との関係」であり、その他にもそれらと関連づけて様々な質問を行った。

3. 事例分析

ここでは、対象者のうち、それぞれ異なる危機に遭遇し、それぞれの方法でアイデンティティ危機に対処した3人の事例を取り上げる⁹⁸。そして、①彼らの危機以前の様子はどうであったか、②彼らがどのようなアイデンティティ危機を体験し、その危機にどのような方法で対処しているのか、③危機への対処によって彼らがどのような自己の理想像のもとに肯定的あるいは否定的なアイデンティティを獲得しているのか、さらに、④危機への対処がジェンダー関係の安定に寄与しているのかそれとも変動に寄与しているのかという観点から、彼らの生活史を記述し分析する⁹⁹。

(1) A君(22歳)：個人的アイデンティティと伝統的ジェンダー・アイデンティティの間に距離を保ち続けている例

サラリーマンの父親と主婦の母親(彼が10歳の頃からはパート)、そして3歳年上の姉の4人家族で育った。父親は、夕食の準備もするなど近所でも評判になるくらい家事に参加していたが、育児には全くといっていいほど関わらなかった。両親は、「母親が言いたいことを言って父親は黙ってそれを聞いている」というような関係で、父親に比べて母親に対する愛着の方が強く、父親よりも母親に叱られることが多かったという。子どもの頃は、男らしさや女らしさについて考えることはなく、「男のくせに泣くんじゃない」と言われると、「男の子は泣いちゃいけないんだ」と思って我慢していた。

アイデンティティ危機は、思春期の性の目覚めに際して訪れた。中学生の時に男の子を好きになってしまい、「いけないことだ」と思った。誰にも相談できず、「女の子を好きになんないといけないのかな」「いつ直るかな」とも考えたが、高校の時にまた男の子を好きになってしまった。「ふっ切れるまでに時間がかか」ったが、結局考えてもどうしようもないから、「悩むことはない」、「それはその人の生き方で、誰にも迷惑かけなきゃいいんじゃないの」と思うようになった。現在、彼は自分自身を同性愛者だと自覚している⁹⁸が、常にそのことを意識しているわけではないし、異性愛者を演じなければならないときは演じればいいので「普通の生活では全然困らない」。ただし、演じているときは「自分を偽っている」と感じるという。彼にはゲイの友だちが何人かいるが、自分も含めて彼らは普段は皆「普通の男性の生活」をしており、ゲイの仲間同士で話す時に日頃の苦勞を分かち合っているという。だから、ゲイの権利を認めさせるよう社会を変えようとは思っていない。同性愛者を嘲笑するような世間の

風潮に対しては、苛立ちを覚えるというよりも、「その程度の見方しかできないのか」と見下している。

彼はこの「危機」に対して、自らを同性愛者として自覚し、同性愛も認めるという価値にコミットしていく。ただし、彼は自己の同性愛性を公表しておらず、異性愛男性としての役割演技を行っている。つまり、彼は、社会が男性というカテゴリーに対して付与するジェンダー・アイデンティティと個人的アイデンティティの間に距離をおき、ゴッフマン（訳書 1970）のいう「パッシング」⁹⁾を行っている。ありのままの彼を受け入れてくれる仲間がいるにせよ、少なくともセクシュアルな領域に関しては、現在の彼が肯定的アイデンティティを獲得しているとはいいたくない。また、彼のこうした危機への対処の仕方は、むしろ今日の異性愛至上主義の安定に寄与しているといえよう。

しかし、セクシュアリティに関する彼の危機は、性別役割分業を問い直すきっかけとなった。この危機をきっかけに、彼は「男と女の違って何だろう」と考えるようになった。そして、「男はこうあるべきだとか」いうことは「社会が決めていることであって、人間の本質とか真理とは関係ない」とか、「いわゆる男らしさからは離れた……少数派の人たちを多数派の人たちが非難するのはおかしいんじゃないか」とか、「そもそも男らしさ女らしさって関係ないんだ」という考えを持つに至った。

将来の自己像としては一番に家庭生活をイメージする。同性愛者であるとの自覚にもかわらず、将来は女性と結婚したいという。そして、仕事で空いた時間はできるだけ子どものために使ってやる「良きパパ」になることが夢である。

自己の理想像を父親になることに求めているのは、男性としての主要な役割である父親役割を担うことによって自己の同性愛的な非男性的性質を補おうという自己防衛の心理的メカニズムによるものかもしれない。だが、男らしさ女らしさで物事を判断せず、育児に積極的にかかわる父親に自己の理想像を求めることで肯定的アイデンティティを獲得しようという彼の態度は、彼の男性性形成がジェンダー関係の変動に寄与する可能性を示している。

(2) B 君 (22歳)：自己変革によって個人的アイデンティティを平等主義的ジェンダー・アイデンティティへと近づけようとしている例

会社員の父と専業主婦の母、そして1歳年上の兄の4人家族で育った。父親は早朝に出かけて夜中に帰宅するので、幼少期には平日ほとんど顔を会わせることがなかった。家事は100%母親が行い、育児は母親と近所に住んでいた母方の伯父が担当してい

た。父親は昔「男尊女卑」というタイプでとても怖く、B君は「母親にべったり」だったが、現在は父親よりもむしろ「母親の方が強い」という。高校生くらいまでは、男らしさや女らしさについて考えたことはなく、結婚したら「男は仕事、女は家庭」という分業をするのだらうと漠然と考えていた。

彼の「危機」は、高校3年の時に女性と交際を始めたのがきっかけだった。彼女は2歳年下で、特にフェミニストというわけでもないが自分の意見をはっきり主張する人だった。彼はそれまでは「自分が中心で“彼女”は飾りのようなもの」だと思っていたので、当初は彼女のそうした主張に驚くと同時に「女尊男卑」ではないかとの強い反感をもった。しかし、大学1年の頃までには彼女の意見を自然と受け入れるようになった。そして、彼女を「飾り」などではなく「対等なパートナーとして助け合う」存在として認識するようになった。現在でも2人の交際は続いており、将来は結婚という形態や同居にはこだわらず、お互いのやりたいこと（仕事）を尊重しながらパートナーとして助け合っていきたいと考えている。このように、彼は、恋愛を契機にこれまで自明視していたジェンダーに関する価値を相対化するに至った。

ただし、彼によれば、彼のこうした価値観の形成に彼女が全面的な影響を及ぼしたというよりも、彼女との交際は一つのきっかけであって、それを機に自分でいろいろなものを見ながら男女平等主義的な物の見方を採り入れるようになったという。彼自身は、社会人やマス・メディアによってもたらされる女性差別の情報や、仕事をこなす生き生きした女性を描いたアメリカ映画の影響が大きいと考えている。従来どちらかといえばそれがもつジェンダーの再生産機能ばかりが強調されてきた嫌いのあるマス・メディアが、彼にとっては従来のジェンダー観を相対化させるものとしてとらえられているのである。

彼は性別役割分業を自明視していたにもかかわらず「危機」を契機として現在のような極めて男女平等主義的な価値観を持つに至った。しかし、彼のこうした「転向」はまったくスムーズに進行しているわけではないことが彼の発言からうかがえる。例えば、女性の家事責任に関して、「全部やってもらえるならうれしいけどフェアじゃない」ので「負担がフィフティ・フィフティになるように」すべきだとか、収入や職業的地位の点でパートナーが自分を上回ることにに関して「心の中では引っかかるけど認めなくてはならない」というものである。つまり、彼の「危機」は、幼少期以来内面化してきた「男尊女卑」的価値と、彼女との交際以後に内面化されたかあるいはそれ以前に内面化されていても自覚することのなかった男女平等主義的価値との葛藤である。これはすなわち彼らを取りまく社会的環境にセクシズムと男女平等という相

異なる価値が並存していることの反映でもある。また、彼の発言は、幼少期に内面化された価値あるいは形成された欲求性向を青年期に変革することの困難さを示唆している。

このように、彼は、「男尊女卑」的な個人的アイデンティティを自己変革によって平等主義的ジェンダー・アイデンティティに近づけるという方法で、「男女平等主義の男性」という自己の理想像のもとに肯定的アイデンティティを獲得しようとしている。こうして彼は、「男尊女卑」的で性別役割分業の家庭に育ちながら、男女平等主義的で伝統的な結婚観からも自由な考えを持つに至った。彼のこうした態度もまた、ジェンダー関係の変動に寄与する可能性を秘めている。

(3) C君 (25歳)：伝統的ジェンダー・アイデンティティを否定して個人的アイデンティティを固守しようとしている例

サラリーマンの父と専業主婦の母、2歳年上の兄の4人家族で育った。父親は「男尊女卑」タイプで、C君が小学校の高学年の時から高校生の時まで単身赴任をしており、母親が家事・育児のすべてを行っていた。父親は「論理的」でないで他の家族員と話が合わず、すぐ暴力を振るうような人だったから、自分には優しくしてくれたが怖い存在だった。母親からは幼少期以来様々な点で兄と比較され、「なんでお兄ちゃんにはできるのにあんたにはできないの」と言われ続けた。彼は自らを「もともと努力しない人」と評し、そうした性格は「もう直りようないのが分かっている」と言っているが、母の期待に添おうとしたのにできなかったという経験がそうした性格の形成に影響したと彼は考えている。

彼は、「男らしいか」と聞かれると「男らしくない」ときっぱり言い切る。彼によれば、「体つきが華奢」「言葉遣いが女っぽい」「仕草がなよなよしている」「指導力がない」ところなどが「男らしくない」という。しかし、否定的な自己イメージは持っていない。彼の「危機」は、中学の頃訪れた。友だちから「男らしくしなくちゃ」と言われ、意識して男らしくしようとしたが、1年くらいで男らしくすることに疲れてしまい、一向に自分を変えることができなかった。周りの期待に沿えないことに悩んだが、結局「できないものはできないんだから、もう間違ってるもへったくれもないなあ」との結論に達した。それをきっかけにして「男らしさって何だろう」と考えるようになり、次第に「男らしさに根拠はない」と思い始めた。そして、たとえ周りから男らしさを強要されることがあっても、努力して自分を変えるよりありのままの自分を肯定するようになった。

彼がここまで個人的アイデンティティを固守できた背景には、読書好きだったことがあると思われる。彼は大学で1年間留年したが、当時を振り返って、「ベルトコンベアにのっかってる」状態から突然放り出されることによって、すべてのことに必然性が感じられなくなり、いやでも自分に向かい合わざるを得なくなった、と語っている。そして、その1年間本を「読み漁った」結果、ますます「男らしさに根拠はない」との確信を強めたという。特に、人間の「社会的なもの」では割り切れない部分に目がいくようになったのは、ある評論家の著書の影響が大きかったと考えている。また、これまで同年齢男性との親密な交流の機会が少なかったことも関係していると思われる。彼は中学、高校を通じて部活に入らず、また大学でも留年したせいで、仲間集団で行動することがほとんどなかったという。青春期から青年期にかけての同性仲間集団が社会に支配的なジェンダーに関する価値を伝達する機能をもつとすれば、そこに深くコミットしなかったことが独自のジェンダー観の形成を容易にしたのではないだろうか。

彼は、自分にも「社会的なものが根付いている」から男らしさや女らしさに流されてしまうのが楽ではあるが、一人一人の人間には「社会的なもの」では割り切れないものがある、それを大切にしたいから「社会的なものに引っ張られたくない」と考えている。もともと1人が好きで、子どもも欲しいとは思わないので、結婚の必要性は感じない。現在兄と2人で暮らしており、家事は兄の分までほとんど担当している。いやな家事はなく、今は時間がなくてやっていない料理も時間ができたらぜひやりたいと思っている。

こうして彼は、「男らしくあれ」という伝統的ジェンダー・アイデンティティを否定し、「男らしくない」という個人的アイデンティティを固守することで「危機」に対処し、「社会的なものに引っ張られない人」を自己の理想像として肯定的アイデンティティを獲得しつつある。男らしくない自己を貫き、独身主義で、性別役割分業に批判的であるという彼の態度もまた、彼の男性性形成がジェンダー関係の変動に寄与する可能性を示唆している。

4. 考 察

(1) 「性役割の社会化」再考——「社会化システム」のジェンダー形成機能

「アイデンティティについて論ずる際、個人の人格的成長と共同体の変化とを切り離すことはできないし、また、個人の人生におけるアイデンティティの危機と、歴史発達における現代の危機とを切り離すこともできない」(Erikson 訳書 1969, 16頁)。

男性たちの体験した「危機」は、われわれの社会におけるジェンダーをめぐる価値が決して一枚岩ではなく多元化し錯綜していることを示唆している。また、幼少期に自明視していたジェンダー観を相対化し、新たな価値にコミットしていくという彼らのアイデンティティ形成は、男女のありかたが急速に変化しつつある社会に彼らが適応していく過程であると同時に、彼ら自身がそうした社会の変化の担い手となっていることの現れでもある。

このように、アイデンティティ論の立場から見ると、ジェンダー形成とは、多元的社会において内面化された多様な価値の中から独自の方法でコミットすべき価値を選択し、独自の自己像を形成していくという主体的な営みである。確かに、われわれは家族、学校、仲間集団、マス・メディアなどの「社会化システム」を通じて価値を内面化する。しかし、それらが伝える価値は決して一枚岩ではなく、各「社会化システム」がそれぞれ異なる価値を伝えたり、同一の「社会化システム」が相矛盾する価値を伝えたりもする。そうして内面化された多様な価値の中から、われわれはライフ・サイクルの転機ごとに選択を行い、特定の価値に意識的にコミットしていくのである。多元的・変動社会におけるジェンダー形成の諸相を見定めるために、われわれは「性役割の社会化」研究によって蓄積された知見をふまえながらも、それを超えていくことが必要である。以下に、事例研究から得られた知見をもとに、ジェンダーに関する価値を伝達する各「社会化システム」について考察を行う。

① 定位家族

事例にあげられた男性たちは、必ずしも彼らの定位家族において支配的な価値にコミットしているわけではない。A君は彼の父親とは異なり積極的に育児に関わりたいと考えているし、B君もC君も彼らの両親が典型的な性別役割分業をとっていたのに反して、男女平等主義あるいは個人主義の観点から性別役割分業に否定的な態度を示している。そして、そうした家族のありかたを相対化し価値の転換をはかる契機となったのが、ジェンダー・アイデンティティの危機である。

しかしその一方で、定位家族がジェンダー形成の最初のかつ最も重要な「担当機関」であることもまた事実である。幼少期に家族において内面化された価値の影響は強力である。B君の事例は、典型的な性別役割分業の家族で内面化されたと思われる「男尊女卑」的な価値や欲求性向がいかに強力なものかを示している。また、両親との相互作用を通して形成されたパーソナリティ特性はその後のジェンダー・アイデンティティ形成に影響を及ぼし続ける。C君の事例は、母親の過剰な期待にさらされる中で「努力しない」性格が形成され、それがジェンダー・アイデンティティの形成にまで影

響を及ぼしたことを示している。

このように、定位家族は男性性の形成に極めて重大な影響を及ぼしている。しかし、両者の間に直接的な因果関係があるわけではない。彼らは家族の絶大なる影響を被りながらも、どのような男性になるのかを主体的に選択しつつ自己形成しているのである。

②マス・メディア

対象となった男性たちは、これまで性役割の社会化研究が強調してきた、セクシズムに満ちた価値を伝達しジェンダー関係を再生産するというマス・メディアの機能よりも、むしろその価値の相対化や変革の機能に言及している。B君の場合は女性差別の現状を告発する報道番組や活発な女性を描いた洋画が、C君の場合は評論家の著書が、家族の価値とは異なる価値をもたらしたり、自らのコミットする価値に承認を与えたりしている。また、事例にはあげられなかったが、本研究において面接を行ったD君は、「本や漫画を読みながら自己問答する」ことや、少女漫画のパターン化されたストーリーであっても「そのパターンがどうやったら崩れるかというふうにいるいろいろなパターンを考え」ながら読むことを通じて性別役割分業にとらわれない価値観を形成してきたという。

このように、男性たちはジェンダーに関する価値の形成に際してマス・メディアに主体的に接触しており、今日のジェンダーに関する価値を相対化するための手段としてもマス・メディアを利用している。今後、マス・メディアがジェンダー形成に及ぼす影響をより適切にとらえるためには、メディアへの接触を通じて受け手がそこから引き出している効用を問題とする「利用と満足の研究」の視点も必要となつてこよう。

③仲間集団

男子仲間集団には「少女らしい優しさやおとなしさを軽蔑する」という「男らしさへの脅迫」によって男性を男性たらしめていくという機能があるとされている（Parsons 訳書 1981, 165頁）。それは、裏を返せば、男子仲間集団に深くコミットしなければただけ支配的な男性性への脅迫は少なく、独自の男性性を形成しやすいということである。C君の場合、中学から大学まで「集団」といえるような仲間がおらず、男子仲間集団に深くコミットしなかったことが独自の価値の形成を容易にしたと考えられる。また、先に紹介したD君も、中学から高校にかけて「他の連中とは感覚が合わなかった」のでクラスで孤立し一人で本を読んでいることが多かったと語っており、やはり男子仲間集団に深くコミットしなかったことが独自の価値の形成を容易にしている。

しかし、その一方で、近年のサブ・カルチャー研究が示すように青年期の仲間集団は分化しており、必ずしも仲間集団が全体社会に支配的なジェンダーに関する価値へと導くとは限らない(宮崎 1993)。A君の場合、準拠している仲間集団はゲイの仲間たちであり、彼らは異性愛至上主義の社会で生きていく苦労を分かち合い、同性愛者も認めるという彼を支える価値を承認するという機能を果たしている。

このように、仲間集団は男性性形成において重要な機能を果たしているのであるが、それは男性を必ずしも全体社会に支配的なジェンダーの価値へと導くとは限らない。むしろ彼らは、どの仲間集団にどの程度コミットするかを主体的に決定していくなかで、ジェンダーに関する独自の価値と男性としての独自の自己像を形成していくのである。

④恋 愛

ジェンダー形成とは文化の内面化に他ならない。文化の内面化とは、「単に文化パターンを外部世界の対象として認識する」のみならず「文化パターンをパーソナリティそれ自体の実際の構造の中に組み込むこと」であり、それは「他の人間に対する愛着を確立する」という「情動的なコミュニケーション」によって行われる(Parsons 訳書 1964, 38-39頁)。恋愛が非常に強い情動を伴うコミュニケーションであるとすれば、それが文化の内面化に果たす機能は多大なるものであろう。B君は、女性との交際をきっかけに、「男尊女卑」を自明視する状態から女性を「対等なパートナー」とみなす価値観を形成していった。また、事例にはあげられていないE君の場合、もともと男性が家事をすることに抵抗があったが、大学に入って「男勝りな」女性を好きになったことがきっかけで「それまでの固定観念が崩れ」、「将来働く女性を好きになったら自分も家事をするだろう」と考えるようになったという。彼らの例は、それまで自明視していた価値を相対化させ新たな価値を形成するという恋愛の機能を示している。さらに、恋愛が異性一般ではなく特定の異性への執着を伴う相互作用であるならば、そこで遂行される役割は一般的な男性(女性)役割のみならず極めて個性的な男性(女性)役割なのであり、「ステレオタイプのな女性性・男性性しかない場合」には恋愛において「親密性を保つことは難しい」(土肥 1994)。すなわち、恋愛は、個人が自己を単に男性(女性)と意識するにとどまらず、「どのような男性(女性)なのか」を意識しつつ自己形成していくという点で、ジェンダー・アイデンティティの形成に本質的なものである。

(2) 男性の人間形成とジェンダー

事例分析から得られた知見は、女性の人間形成において「女であること」が重要な意味を持つと同様に、男性の人間形成においても「男であること」が重要な意味を持つことを示唆している。

第1に、女性が「自分らしさ」と「女らしさ」との葛藤を経験するように、男性も「自分らしさ」(個人的アイデンティティ)と「男らしさ」(ジェンダー・アイデンティティ)の葛藤を経験する。A君は「男が好きであること」と「女を好きになるべきであること」の葛藤、B君は「男尊女卑であること」と「女性の対等なパートナーであるべきこと」の葛藤、C君は「男らしくできないこと」と「男らしくふるまうべきこと」の葛藤というかたちでアイデンティティ危機を体験した。そして、A君は個人的アイデンティティと伝統的ジェンダー・アイデンティティに距離を置くことで、B君は自己変革によって個人的アイデンティティを平等主義的ジェンダー・アイデンティティに近づけることで、C君は伝統的ジェンダー・アイデンティティを否定し個人的アイデンティティを固守することで、それぞれ危機に対処してアイデンティティ形成を行っている。また、「危機」を自覚した時期は、A君の場合は性に目覚めた中学生の時、B君の場合は女性との交際を始めた高校生の時、C君の場合は友達から男らしくしろと言われた中学生の時であった。彼らの事例を見るかぎり、「女性の心理社会的発達における分岐点が青春期、ことに初期青春期から中期青春期にある」(井上他 1994)ように、青春期は男性が「どのような男になるか」を決定する分岐点のうちの一つでもあるのではないだろうか。

第2に、女性性が一枚岩でないのと同様に、男性性もまた一枚岩ではない。それぞれの男性が異なる危機に直面し、異なる方法で危機に対処することでアイデンティティ形成を行っているという事実は、男性が多様化していることの現れである。また、それぞれの男性が行う男性性への意味づけの違いが男性を分化させているという点でも女性となら変わりはない。従来の教育におけるジェンダーの研究は、人間形成を捉える際にその視野を教育達成・職業達成という公的領域に限定しすぎていた。そのために、とすれば主婦になることによって公的領域における競争から降りることのできない男性は一枚岩であるかのような錯覚を起しがちであった。しかし、家事・育児やセクシュアリティという私的領域の問題や、何を男らしさと見なすかという価値を考慮するならば、男性の多様化や分化を捉えることが可能となるのである。

第3に、性内分化 (intra-gender differentiation) と男女間の分化 (inter-gender differentiation) が相互に関連していること (吉原 1995) が男性の事例からも確認

された。A君の事例は、異性愛至上主義のわれわれの社会において男性と女性を鋭く分化させる要因である性的志向の違いが、男性内の分化を引き起こしている例である。B君の事例は、「男尊女卑」から「男女平等」へという男女間の関係の変化が、男性内の分化に対応している例である。C君の事例は、「男らしくない」ことの肯定という男性内分化の要因が、男女間の差異を縮小する可能性を示唆している。

このように、近年女性に関して明らかにされつつある事実が、男性に関してあてはまるのが、男性個人の主観を通して見た生活史の考察により明らかにされた。今後は、どのような危機をどの発達段階でどの程度の男性が経験しているのか、男性の危機は女性の危機とどのように異なるのかを客観的側面から明らかにすること、そして、男性はどのような危機を体験したときにどのように対処する傾向にあるのか、言い換えれば男性を分化させる客観的社會構造はどのようなものかを明らかにすることが必要であろう。

われわれの社会におけるジェンダーに関する価値は一枚岩ではなく、多様化している。そうした社会のなかで人間形成が行われる限り、女性のみならず、男性もまた多様化するのである。

(注)

- (1) 「男性性」あるいは「男らしさ」をその内容から定義するのは非常に困難である。なぜなら、何を「男らしい」とみなすかは、文化や場の状況によって異なるし、個人によっても異なるからである。ここでは、吉原（1995）の「女性性」の定義に依拠し、さしあたり「男性性」を「“男”カテゴリーに付与される社会的・文化的意味の総体」と定義しておく。
- (2) 例えば、男女の役割の違いをシステムの維持に機能的な分業とみなすパーソンズ（訳書 1981）にしても、それを資本主義社会における階級支配の維持に伴う不平等な分業と見なすディーム（1978）にしても、ジェンダーに関する価値を一元的にとらえ、各社会化エージェンシー間の葛藤を想定していないという点で共通している。なお、パーソンズとディームの「性役割の社会化」論については、森（1985）で詳しく検討されている。
- (3) 男性の問題に着目した数少ない実証研究のなかでは、コマロフスキー（訳書 1984）、関井（1989）などが代表としてあげられる。
- (4) エリクソンは、アイデンティティに関して、「種々の文脈のなかでその不可欠性を立証する以外に、それを探求することができない」としてあえて定義を行っていない

い (Erikson 訳書 1969, i 頁)。本稿においても、彼に倣い、アイデンティティ概念自体の定義は行わない。

- (5) このことは、「人格的 (personal) アイデンティティをもっているという意識的な感覚」を支える条件が、①「時空における自分の存在の斉一性と連続性の自覚」と、②「他人が自分の同一性と連続性を認めているという事実の自覚」が同時になされることである (Erikson 訳書 1969, 55-56頁) という点に端的に現れている。
- (6) このように、アイデンティティ論では、個人がどのような価値観を持つかということと自己をどのように見なすかということは表裏一体であるにとらえられている。
- (7) 自我アイデンティティが「そのアイデンティティが問題となっている当の個人が当然感じているはずの主観的、反省的なもの」であるのに対し、社会的アイデンティティおよび個人的アイデンティティは、「複数の他者が抱く関心ならびに規定の一部をなして」おり、「個人自身が (中略) 感覚-感情をまったく所有していないときでも存在するものである」(Goffman 訳書 1970, 173-174頁)。
- (8) このように、本稿では「ジェンダー・アイデンティティ」の用語を、「男性性/女性性」とほぼ同じ意味で用いている。なお、ジェンダー・アイデンティティおよび男性性 (女性性) には、①「私は男/女である」という性自認のレベル、②男女で異なって振り分けられる社会的役割のレベル、③性的 (sexual) 志向のレベルの3つが考えられるが、社会学では通常②の形成が問題とされ、①や③は自明のものと考えられる傾向にある。
- (9) コネルの用語。彼によれば、ジェンダーに関する諸事実は相互に関連しており、「ジェンダー関係」という一つの社会構造をなしている (Connell 訳書, 54頁)。
- (10) エリクソン (訳書 1969) はアイデンティティには「肯定的要素および否定的要素の重層構造が含まれている」と考えている (431頁)。そのうち「否定的アイデンティティ」とは、「最も危険で望ましくないもの、にも拘わらず最も現実的なものとして提示されたすべての同一視や役割に、意固地に基礎づけられたアイデンティティ」であり (241頁)、「支配的な文化的理想像が何であるかは知っているが、それらを達成する手段は奪われている少数者」は「支配的な多数者から背負われたイメージ」をそれに結びつけがちである (432頁)。しかし彼は、「創造的な個人は、否定的アイデンティティを自己蘇生の最も基本的な出発点として、受け入れ」ることによって、それを「肯定的アイデンティティ」へと転換することができると考えている (18-25頁)。

- (11) 以上の分析枠組は、草津（1978）、片瀬（1983）、高橋（1994）の示唆によるところが大きい。
- (12) 本研究では、ジェンダー・アイデンティティの危機に関する事例をできるだけ収集する必要があった。このような偏った対象者選択をしたのは、性別役割分業から自由な価値観を持っている男性はジェンダー・アイデンティティの危機を体験した可能性が高いのではないかと考えたからである。本研究の対象者のうち、「危機」を体験した者と体験していない（意識していない）者の割合はほぼ半々であった。
- (13) 「社会化エージェンシー」あるいは「エージェント」という用語の持つニュアンスが「社会の要件と社会化を担う主体の要件との間の齟齬や葛藤を分析の俎上に乗せにくくする」という問題を回避するために渡辺秀樹（1992）が提案している用語。本稿では、人間形成にかかわる集団・個人・社会関係のすべてを包含する概念として用いている。
- (14) もちろん、本研究において、ジェンダー・アイデンティティの危機の体験が今日の青年期男性に一般的な現象であるというつもりは毛頭ない。しかし、少なからぬ男性が「危機」を体験しているという事実は、そうした「危機」をもたらす客観的社会構造が存在することの証左である。それゆえ、男性個々人の主観によって意識された「危機」を明らかにすることは、客観的社会構造を明らかにすることにつながるのである。
- (15) 本研究では、ジェンダーに関する価値が多面的であるからこそ「どのような男性（女性）になるのか」の選択が重要であるとの認識からアイデンティティ形成に焦点を当てた分析を行っている。しかしその一方で、ジェンダーに関する価値が多面的であるからこそ特定の価値に深くコミットしないことが重要であるとの認識もまた可能である。後者の視点からすれば、アイデンティティ形成よりもむしろ「アイデンティティ拡散」あるいは「モラトリアム人間」に焦点を当てたジェンダー形成の研究が必要となってくる。本研究の対象者の中にも「モラトリアム人間」に該当すると思われる者が見られたが、彼らについての考察は、別の機会に譲る。
- (16) 性自認と性的志向は互いに独立に性別逆転が可能である（渡辺恒夫 1989）。A君の場合、肉体は「男」であり性自認も「男」であるが、セクシュアルな関心が「男」に志向している。本研究の対象者の中にもう1人同性愛者であることを打ち明けてくれた者がいたが、彼の場合、肉体が「男」であるが、性自認はどちらかといえば「女」であり、セクシュアルな関心が「男」へ志向していた。
- (17) 「まだ暴露されていないが、暴露されれば信頼を失うことになる自己についての

情報の操作」(Goffman 訳書 1970, 75頁)。

〈引用・参考文献〉

- Connell, R. W. 1987, 森重雄・菊地栄治・加藤隆雄・越智康司訳『ジェンダーと権力—セクシュアリティの社会学—』三交社, 1993。
- Deem, R. 1978, *Women and Schooling*, Routledg & Kegan Paul, London.
- 土肥伊都子 1994, 「心理学的男女両性具有性の形成に関する一考察」『心理学評論』Vol. 37, No. 2, 192-203頁。
- Erikson, E. H. 1968, 岩瀬庸理訳『アイデンティティ—青年と危機—』北望社, 1969。
- Goffman, E. 1963, 石黒毅訳『スティグマの社会学』せりか書房, 1970。
- 井上輝子・亀田温子・波田あい子・平川和子 1994, 「青年期女子のジェンダー・アイデンティティと自己形成」, 女性学研究会編『女性と異文化』勁草書房, 80-121頁。
- 片瀬一男 1983, 「E・H・エリクソンにおける二次的社会化への視点—ライフ・サイクル論の意義をめぐって—」『社会学評論』34巻3号, 254-269頁。
- Komarovsky, M. 1976, 池上千寿子・福井浅子訳『男らしさのジレンマ—性別役割の変化にとまどう大学生の悩み—』家政教育社, 1984。
- 草津攻 1978, 「アイデンティティの社会学」『思想』No. 653, 108-142頁
- 宮崎あゆみ 1993, 「ジェンダー・サブカルチャーのダイナミクス—女子校におけるエスノグラフィーをもとに—」『教育社会学研究』第52集, 157-177頁。
- 森繁男 1985, 「学校における性役割研究と解釈的アプローチ」『京都大学教育学部紀要』218-228頁。
- 1992, 「“ジェンダーと教育” 研究の推移と現況」『教育社会学研究』第50集, 164-183頁。
- 中西祐子 1993, 「ジェンダー・トラッキー性役割観に基づく進路分化メカニズムに関する考察—」『教育社会学研究』第53集, 131-154頁。
- 小此木啓吾 1978, 『モラトリアム人間の時代』中央公論社。
- 越智康司・菊地栄治・加藤隆雄・吉原恵子 1992, 「女子学生文化の現代的位相—女性内分化と女性性の両義性の視点から—」『東京大学教育学部紀要』第32巻, 119-146頁。
- Parsons, T. and Bales, R. F. 1956, 橋爪貞雄・溝口謙三・高木正太郎・武藤孝

典・山村賢明訳『家族』黎明書房, 1981。

Parsons, T. 1964, 武田良三監訳『社会構造とパーソナリティ』新泉社, 1973。

関井友子 1989, 「“男性性”に関する実証的研究—性別役割分業観と自己評価において—」家族問題研究会『家族研究年報』No. 15, 65-83頁。

高橋征仁 1994, 「アイデンティティ論再訪—現代青年における相対主義の変容をめぐって—」, 東北社会学研究会『社会学研究』第61号, 109-132頁。

渡辺秀樹 1992, 「家族と社会化研究の展開」『教育社会学研究』第50集, 49-65頁。

渡辺恒夫 1989, 「イヴ原則とアンドロジニーを超えて」, 渡辺恒夫編『男性学の挑戦—Yの悲劇?—』新曜社, 31-74頁。

吉原恵子 1995, 「女子大学生における職業選択のメカニズム—女性内分化の要因としての女性性—」『教育社会学研究』第57集, 107-124頁。